闇の中の仮面

三好徹

闇の中の仮面

三好徹

闇の中の仮面
昭和四十六年四月二十八日第一刷発行
著　者　三好徹
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号一一二
電話　東京（九四五）一一一一（大代表）
振替　東京　三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
定　価　五五〇円

©Toru Miyosih 1971 Rrinted in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-125044-2253（0）　（文1）

目次

闇の中の仮面……5
天罰……75
赤い満月……103
潜在殺人……135
予告電話……175
追跡ゲバラ日記……225

装幀

原

田

維

夫

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

三好徹作品集

闇の中の仮面

1

対談の相手が女優の新島千鶴だときいて、飯沼は即座に出席を承諾した。ただ場所が狸穴(まみあな)のレストラン波里谷であることに、多少の不満があった。できることなら、かれが管理の責任者となっている高層ビルを使ってもらいたかった。三十八階建てのそのビルにも、和洋の料理店がいくつか店を出しているのだ。

東京にも、三十階四十階というビルが出現しはじめている。飯沼が大学を出た十五年前には、想像もできなかったことである。しかし、建築技術の進歩がそれを可能にした。過ぎ去ってみればはやいものだが、かれの髪の毛にも白いものがまじりはじめている。それだけ年月が経っているのだ。

そういうことを考えると、新島千鶴がいまもって第一線の女優としてランクされていることに、飯沼は驚嘆とも感慨ともつかぬものを覚えずにはいられなかった。

かれが大学を出たころ、新島千鶴は少女歌劇から映画界入りした。百万ドルの脚線美というのが、宣伝のうたい文句だった。飯沼も彼女の主演映画を何本か見ているが、新島千鶴の人気が十数年も長続きしているのは、必ずしもその脚線美のためではなかった。映画入りして数年後には主演女優賞をもらうほどに演技派として成長したし、すでに四十を超えているはずだが、十歳は若く見えるのだ。それに独身を保ってきたことも、人気の衰えない秘密があるのかもしれなかった。

飯沼の年齢からすれば、胸がときめくというほどではないにしても、指定された日は午前中からなんとなく落ち着かなかった。対談を企画した雑誌社の編集部員に紹介されたら、どういうふうにいったものか、学生時代からあなたのファンでしたというか、いや女優に年のわかるような話は禁物だというから、テレビの連続ドラマを欠かさずに見ているというか、などとあれこれ考えた。

部下の笠井にもわかるらしく、

「なにかいいことでもあるんですか」

といわれた。

正直にいうのは照れ臭く、飯沼はこともなげに答えた。

「いいというほどのことじゃないが、雑誌社から新島千鶴との対談をたのまれてね、ダイヤモンド対談というんだそうだが、そういうものに出たことがないんでね、引き受けたものの、どんな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ことを喋ったらいいかと気にしているんだ」

新島千鶴と会えるとは羨ましいですな、という言葉が笠井の口からもれるにちがいない、と飯沼は予期していたのだが、笠井はまったく別なことをいった。

「新島千鶴ですか。あれは見かけによらずたいそうな女だそうですねえ」

その語調には、いくぶん軽蔑がこもっているように思われた。たいそうな女といういい方にも、それがうかがわれた。

「たいそうな女って、きみ、なにかあったのかね？」

「部長は、ご贔屓ですか」

見すかされたような気がして、飯沼はかえってそっけなく答えた。

「いや、別に。でも、どうして？」

「ご贔屓の女優だと悪いと思ったもんですから」

「そんな年じゃないよ」

と飯沼は笑ってみせた。

笠井は安堵したようにいった。

「ならいいんですが、あの女は、テレビや舞台の役柄とは違って、実生活は相当のもんらしいですよ。わたしの義弟に新聞社の芸能記者をしている男がいるんですが、そいつの話ですと、彼女はついこの間まである政治家の二号をしていて、別れるときには、二千万円の手切金をとったそ

うですよ。それで独立プロを起こすとかいう噂ですが、それを聞いて以来、わたしは、恋に悩む人妻の役なんかしているのを、アホらしくて見られなくなりましたよ」

「そうかね」

と返事したものの、飯沼がいやな感じをあたえられたことは慥かであった。きれいな芝生に泥だらけの靴で踏みこまれたような気がしたのだ。といって、笠井を責めるわけにもいかなかった。笠井にしても、邪気があったのではない。自分の知っているゴシップを披露したまでのことだ。それも、飯沼が新島千鶴の贔屓ではないと聞いたから、語ったのであろう。おれは彼女のファンさ、といっていれば、おそらく黙っていたにちがいない。

ある意味では、飯沼の「そんな年じゃないよ」という一言が惹き出したのかもしれなかった。そして、この種のなにげないやりとりが当人たちの思惑をこえて、まったく別なところに波紋を呼び起こすことがあり得るのだ、と飯沼はのちになって思い当たるのである。

2

飯沼は、波里谷の店頭で、新島千鶴と顔をあわせた。かれが着いたとき、彼女の方も車から下り立った。

迎えに出ていた雑誌社の編集部員が、

「こちらが高層ビル株式会社の飯沼さんです」

と紹介した。

新島千鶴は、和服の裾をおさえるようにして腰をかがめた。すんなりした手にはめられたダイヤが光った。飯沼の方も、あわてて答礼しながら、やはり美しいなと思った。

波里谷という店は、座敷と椅子席に分かれていた。三階建てのなかなか凝った造りである。那智黒の小石をしきつめた廊下を、女中が先に立って案内した。対談の場所は、二階の座敷に設けられている。

飯沼は先に立って歩いた。支配人室と書かれたドアの前にいた男が、客を迎える姿勢をとって、いらっしゃいませ、と挨拶した。飯沼は軽く頭を下げて応じたが、男が、おやというふうに眼を瞠ったのに気づいた。

男の視線は、うしろの新島千鶴の上に注がれている。顔を知られた女優だけに、これは仕方がない。現に、店頭でも居合わせた客たちの視線を集めているのだ。あら、新島千鶴よ、という声も聞こえた。有名だということは、いいこともあると同時に辛いこともあるにちがいない、と飯沼は考えさせられた。

対談も、そんな話題からはじまった。

「どこへ行っても、じろじろ見られて大変でしょう」

「ファンあっての女優ですし、それに、見ていただくのが商売ですから……」

新島千鶴は口もとに手をあて、しとやかに笑った。
二カラットはあろうかと思われるダイヤモンドだった。駈け出し女優がはめるのとは違って、ちぐはぐな感じはなかった。新島千鶴の手にあることによって、ダイヤも美しさをますという感じさえある。飯沼はそう思い、話題が途切れたときに、それを話の接穂にした。
新島千鶴は、
「十年ほど前になりますか、主演女優演技賞をうけたときに、後援会からいただいたんですの」
「ああ、あの映画はわたしも拝見しました。いい映画でしたね」
「ご覧下さいましたの。嬉しいわ」
「見ましたとも。昭和三十一年でしたか、二年でしたか……」
「あら、お婆ちゃんだということが、わかってしまいましたわ」
新島千鶴は身をよじるようにして、微笑をうかべてみせた。
飯沼は、自分の中途半端な感情を、もてあまし気味だった。政治家の女だったとか、二千万円の手切金をとったとかの話が、かれの内がわにひっかかっているのだが、眼の前の新島千鶴は、テレビで見馴れているままの美しい女優である。いや、現実感のない映像とはちがい、生きている女である。表情があり反応のある肉体がそこにあった。かれが手をのばせば、白い柔肌に触れることもできる距離にいるのだ。
もちろん、そんな恥知らずの行為はできもしないし、許されるはずもないが、対談の間じゅ

う、彼女からかもしだされる熟れた情感に、飯沼は渇きをおぼえた。
「それでは、このへんで」
と仙崎という編集部員がしめくくったのは、夜の九時ごろだった。かれは、女中に車の手配を命じたが、飯沼は、自分は待たしてある、と告げた。仙崎は、
「新島さんは？」
「わたくし、帰してしまいましたの」
「じゃ、呼びましょう。どちらまで行かれますか」
「NRテレビまでお願いしますわ」
波里谷からNRテレビ局までは、歩いても数分の距離である。編集部員がちらっと飯沼を見た。飯沼は口を出した。
「もしおよろしければ、わたしの車でお送りしますが……」
「ありがとうございます」
新島千鶴は頭を下げてから、ちょっと思案し、NRでの仕事は十時からになっている、それまでこの座敷に居残って休息したいが、できないものだろうか、と編集部員にいった。
「いいですとも。じゃ、車もそのころにこさせましょう」
「すみません、わがままをいって」
新島千鶴は、そういってから、

「こんど高層ビルでロケでもありますときには、ぜひご案内いただきたいものですわ」
と如才なく飯沼の方を向いていった。
「ええ、そのときは喜んでご案内しますよ」
飯沼は、内心では、ふられたなと思いながらも愛想よく応じた。そのくせ、新島千鶴と会う機会は二度とないだろうな、とも考えていた。
もともと、まったく次元の異なる人生を生きてきたのである。それが顔を合わせ得たのも、高層ビルが東京の新名所となり、飯沼がそこの管理責任者の職にあったから、対談する機会が生じたといえる。新島千鶴と二度と会わないとしても、それは当然である。しかし、飯沼はその一ヵ月後に、新島千鶴と会うこととなった。もっとも、そのときは彼女は生きてはいなかった。死体となっていた。

それは八月末の日曜日であった。飯沼は自宅でテレビを見ていた。
電話が鳴りひびいたのは、九時ごろであった。こんな時間にだれからだろう、と思いながら、かれは受話器を耳に当てた。
「部長ですねッ、わたし、笠井です」
声がふつうではなかった。完全に上ずっていた。
「どうしたんだね？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com